

『羊の歌』『青春』を読む（前半）

立命館大学大学院文学研究科 福井優

I. 概要

- ・加藤周一（1919～2008）「青春」『羊の歌——わが回想』岩波新書、1968 年、188～200 頁、改 213～226 頁。初出『朝日ジャーナル』1967 年 3 月 26 日号
- ・「仏文研究室」（東京帝国大学文学部仏文研究室）—「青春」（《マティネ・ポエティック》の友人たち）
- ・本章では、主に 4 つの話題が登場する。①ポール・ヴァレリーとの出会い、②《マティネ・ポエティック》の結成、③能との出会い、④中西哲吉の死→どれも加藤を理解するうえで、極めて重要な事項

加藤は、東京帝国大学医学部に入学後まもなく、湿性肋膜炎を患い、一時生死の境をさまよう。病状は回復するが、加藤は、身近に迫る「死」を予感しながら、そうならざるを得ない世界の秩序を憎悪し、どれほど小さな存在であっても、それを破壊しようとするものは悪でなければならぬと思った。そして加藤はこの頃、フランス文学、ことにヴァレリーの著作に出会い、近松にはない「文学」の世界があることを知り始める。

また加藤の家には、山崎剛太郎や中村真一郎、福永武彦、窪田啓作、中西哲吉、原田義人といった文学を愛好する友人たちが集い、彼らは特にフランス象徴派の詩人たちの作品を熱心に読んでいた。やがてその集りは、中村の提案で自作の詩の朗読会に発展し、押韻定型詩を提唱する《マティネ・ポエティック》が結成される。戦後、彼らは詩集を刊行するが、それに対しては多くの批判が寄せられた。しかし、《マティネ・ポエティック》の同人たちは、次第に戦争に巻き込まれていき、原田と中西は出征し、ついに彼らは集まることができなくなってしまった。

その頃、埼玉県川口市に住む、鉄工所を経営する中村の親戚のひとり息子が出征するということで、その壮行会が催されることになり、加藤も出向く。加藤にとって出征する青年の呻き声を聞くのは堪え難かった。また加藤は鉄工所の主人の紹介で、水道橋の能楽堂に赴く。能楽堂には外界とは全く別の世界があり、梅若万三郎や金剛巖ら名人たちの舞台に触れ、はじめて「芝居」という言葉の究極の意味を発見した。

友人たちは次々と戦地に送られていく。ある友人の一人は、召集され中国へ行ったが、病を得て内地に送還され除隊となった。しかし、その友人は、戦地での経験により中国へ行く以前と変わってしまった。また中西も戦争で死んでしまった。加藤は中西を思うとき、抑え難い怒りを感じ「太平洋戦争のすべてを許しても、中西の死を私が許すことはないだろう」と思うのであった。そして、その後も加藤は沈黙しようと考えたとき、中西を思い出した。一高時代、中西の書いた文章が学生新聞に掲載されるに当り、不穏な箇所削除が命じられた。中西は応じなかった。しかし、次号には中西の別の文章が「空又覚造」という署名で掲載されていた。

II. 解説

第 1 段落 病床にて

私は大学に入って、まもなく、肺炎につづいて、湿性肋膜炎を患った。化学療法はまだ行われず、抗生物質はまだ発見されていなかった。私は一時生死の境を彷徨し、その後の回復期を、世田谷の赤堤の借家で、なすこともなく、過した。その回復期の間、生きていくことは、それだけで、貴重なことのように思われ、傍からみればとるにも足らぬ小さなことが、私には、世界中の何ものにも換え難いよろこびになった。一杯の熱い番茶、古い本の紙の匂い、階下の母と妹の話し声、聞き覚えのあるいくつかの旋律、冬の午後の澄んで明るい陽ざし、しずかに流れてゆく時間の感覚……そのとき、「死」とは、そのよろこびを私から奪うものに他ならなかった。私は自分の瘦せた手肢をみつめ、それが焼けて跡かたもなくなるだろうということ、またその手肢を見つめている意識そのものが消えてなくなるだろうということを想像し、そうならざるをえないように出来上がっている世界の秩序そのものを、憎悪した。それは悪であり、不正であり、醜悪な不合理である。熱にうなされた子供の私が、悪夢のなかで巨大な渦にまきこまれ、無限に深く吸いこまれていったときの、あの息のとまるような恐怖を私は思い出し、「神」を信じてはいなかったが、たとえ神があるとしても、それが正義の神であることはできない、と考えた。世界はつくられたのかもしれないが、やがてほろびなければならぬようにしかつくられていない。「めぐみ」はあたえられたのかもしれないが、やがて奪われるようにしかあたえられていない。すべての存在が死に到るのは、世界の内側の構造のためであって、世界の外側からの「審判」の介入によるのではない。一度それを創ってしまった以上、ただ一つの野の花をふみにじるために、創造者自身といえども、正当な理由を見出すことはできないだろう。必ずしもすべての存在が善ではない。しかしどれほど小さな存在の値うちも測り知れないのであるから、存在を破壊する者は、悪でなければならぬ……〔傍線は福井、以下も同様〕(188～189 頁、改 213～214 頁)

(1) 「私は大学に入って、まもなく、肺炎につづいて、湿性肋膜炎を患った」

- ・加藤は 1940 年 4 月、東京帝国大学医学部に入学。まもなく湿性肋膜炎に罹患し、「一時生死の境を彷徨」する
- ・当該期の加藤は「世田谷の赤堤の借家」に住んでいた。加藤家は 1939 年頃、美竹町から世田谷区赤堤に転居した。なお 1941 年頃に世田谷区松原に転居

(2) 「とるにも足らぬ小さなことが、私には、世界中の何ものにも換え難いよろこび」→加藤は恐らく初めて「死」に直面し、日常生活の中のいずれも「とるにも足らぬ小さなこと」＝「熱い番茶」「紙の匂い」「話し声」「旋律」「明るい陽ざし」「しずかに流れてゆく時間」(「聴覚」「視覚」「嗅覚」「触覚」に関わる事柄を畳みかけるように叙述)のかけがえのなさを実感する

(3) 「熱にうなされた子供の私が、悪夢のなかで巨大な渦にまきこまれ、無限に深く吸いこまれていったときの、あの息のとまるような恐怖」

- ・私自身がうず巻きと共に深く落ちてゆくこともあった。宇宙の全体が、うず巻きとなり、

それが気体か液状のものかそれとも他の何ものであるかはわからず、とにかく廻転しながら限りなく深く吸いこまれてゆく。底に何があるかは私にわかっていない。おそらくそこには何もないのであり、無限に下降しながら、無限に私の世界——理解することの出来るこの世界から遠ざかってゆく。」(35 頁、改 40 頁)

- ・「渋谷金王町」での「悪夢」の意味。加藤は、恐怖の対象として「死」「家庭の外に無限に拡がっていた人間の社会」「未知なるもの、一般に理解できぬもの」を挙げる。いずれにせよ、それは「合理的な秩序」「理解することのできる世界」の破滅と結び付いていた

- (4) 「どれほど小さな存在の値うちも測り知れないのであるから、存在を破壊する者は、悪でなければならない」→たとえそれが世界の創造者である「神」であったとしても→加藤の基本的な立場——「とるにも足らぬ小さなこと」「一つの野の花」「小さな存在」への愛——の表明と、本章後半で加藤やその友人たちの小さな世界が「いくさ」に踏みにじられていくことを暗示

第 2 段落 ヴァレリーとの出会い

病身の子供の頃と同じように、私は、ながびいた恢復期を、本を読んで暮していた。しかし私の興味の対象は、すでに、子供の頃の銀河系宇宙や先史時代の話から、美女との出会いや恋愛の冒険に移って久しくなっていた。私は文学に興味をもつようになり、近松の道行や明治以後三代の小説に読み耽った。しかしそういう文学が、私の空想のすべてを満足させていたわけではない。空想の赴くところは、必ずしも人情の機微ばかりでなく、また歴史や社会についての、知的な領域にも及ぼうとしていた。しかし科学は、検証することのできないような空想とは、係らない。近松は、情死の甘美を謳うけれども、ほとんど知的要素を含まない。科学も近松も満足させないだろう空想に、私を誘ったのは、西洋の文学であった。私は近松の世話物によって代表される文学とはちがう種類の文学が、人間生活の感覚的・感情的・知的領域の「全体」に涉り得るということを、はじめて知ろうとしていた。パスカルからジッドまで、ラシーヌからプルーヴストまで。殊に「海辺の墓地」と「レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説」は、その頃の私の聖書であった。しかし大部分のキリスト教徒が、聖書の歴史的背景についてほとんど何も知らないように、私は地中海を見たことさえなかったし、イタリア文芸復興期について何を知っていたわけでもない。語学的知識に到ってはあまりに貧しかったので、もし偶然手に入れたギュスタヴ・コーアンの周到な註釈がなかったら、「海辺の墓地」を読むことを、あきらめていたかもしれない。「レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説」には、中島健蔵・佐藤正彰訳があった。「海辺の墓地」には——たしかに訳が出版されていたが、その訳はほとんど一行おきにまちがっていた。私は仏文研究室にあったヴァレリーの著作を借り出して、片端から読んだが、もちろん私が理解したのは、ヴァレリーのすべてではなかった——というよりも実に小部分にすぎなかった、ということは、後になって、友人のあるフランス人に「エウパリオス」を読んでもらったときにも、はっきりした。しかし私が興味をもったのは、その特定の考えや、特定の作品に対してではない。その感覚的・知的世界の全体、その全体の構造——あるいはむしろ様式に、私にとっての一種の啓示があ

ったのである。ヴァレリーは私にとって、単に詩人でも、美学者でも、文芸批評家でも、科学者でも、哲学者でさえもなく、それらの専門的な知的領域の全体に対して、一人の人間の態度を決定するような何ものかであった。ヴァレリーの著作との出会いは、私にはあまりに貴重に思われたので、それを文学とよぶかよばないかは、もはや私にとってどうでもよいことであった。
(189～191 頁、改 214～216 頁)

(1) 「検証することのできないような空想とは、係らない」科学と「情死の甘美を謳うけれども、ほとんど知的要素を含まない」近松とを二項対照的に表現→「西洋の文学」、ことにフランス文学（特にヴァレリー）は「人間生活の感覚的・感情的・知的領域の「全体」に涉り得る」→加藤は「文学」概念の拡大を提唱（加藤「文学の擁護」〈1976、著 1 巻〉を参照）。自身の「文学」の定義の原点と位置付けているのではないか

(2) ポール・ヴァレリー（1871～1945）について

- ・フランスの詩人・批評家。当該期の加藤の「聖書」だった『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』（1895）は「自分の芸術的方法論を述べた」評論であり、「海辺の墓地」（1920）は「故郷セートの墓地に想を求め、生と死を象徴的に歌いあげた絶唱」である。その詩は「きわめて難解」だが、「厳正な古典的格調とすぐれた音楽性によって、象徴派の試みを極限にまで追求し」た¹
- ・日本におけるヴァレリー受容は、1926～27 年頃から東京帝国大学仏文研究室を中心に急速に始まり、小林秀雄に影響を与えたことからわかるように、その詩よりも評論が重要視された²→加藤は 1939 年頃にヴァレリー及び象徴主義と出会い、定型詩の試みが始まる（「青春ノート V」が画期であり、同ノート 39 年 6 月 19 日付の「TRAIN POUR TRAIN」に初めてヴァレリーの名前が記される）³
- ・「高等学校へ入ってから〔1936 年 4 月～39 年 3 月〕、私は翻訳されていた西洋文学を——ということは、主として十九世紀の小説と二十世紀文学の一部とを——手あたり次第に読み、中島・佐藤訳の『ヴァリエテ』に出会ったのである。私はそこに、思考の厳密さと感覚の洗煉との比類のない重なり、抽象的概念と具体的な「イマージュ」との微妙な統合、つまるところ私にとっての文学の定義に近いものを、見出した——あるいは少くとも見出したと思った。ヴァレリーをもっと多く、もっと丁寧に読むためには、フランス語の本文を読む必要があった。」⁴

¹ 渡辺一夫・鈴木力衛『増補 フランス文学案内』岩波文庫、1990 年、初版 1961 年、220～221 頁。

² 清水徹「日本におけるポール・ヴァレリーの受容について——小林秀雄とそのグループを中心として」『文学』1 巻 4 号、1990 年。なおヴァレリーを巡る加藤と小林秀雄の比較については、三浦信孝「ヴァレリーを読む加藤周一——小林秀雄との比較において」（三浦・鷲巣力編『加藤周一を 21 世紀に引き継ぐために——加藤周一生誕百年記念国際シンポジウム講演録』水声社、2020 年）を参照。

³ 半田侑子「加藤周一『青春ノート』から見るマチネ・ポエティック」『感泣亭秋報』14、2019 年、40 頁。

⁴ 加藤周一「フランスから遠く、しかし……」鷲巣力編『『羊の歌』余聞』ちくま文庫、2011 年、初出 1981

(3) 当該期の加藤が読んだヴァレリーの著作⁵

- ・「海辺の墓地」の「ギュスタヴ・コーアンの周到な註釈」
→Gustave Cohen, *Essai d'explication du Cimetière marin*, Gallimard, 1933.
- ・「レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説」には、中島健蔵・佐藤正彰訳があった
→中島健蔵・佐藤正彰訳「レオナルド・ダ・ヴィンチの方法序説」『ヴァリエテ』白水社、1932 年（加藤文庫には 1939 年刊行の 3 版が所蔵されている）
- ・「ほとんど一行おきにまちがっていた」「海辺の墓地」の日本語訳
→菱山修三訳『海辺の墓』椎の木社、1933 年？

(4) 「後になって、友人のあるフランス人に「エウパリノス」を読んでもらったとき」

- ・加藤は 1951～55 年にかけて、医学研究のためフランスに留学。パリの国際大学都市の日本館に住んでいた頃、知り合った「ブルターニュから来ていた哲学科の学生」が、加藤のためにタイプ印刷の教材を用意し、ヴァレリーの建築を主題に芸術論が展開される対話篇『エウパリノスまたは建築家』（1923）を精しく読んでくれた⁶
- ・「何故著者がその場所にその語を用いて他の語を用いなかったか、何故その言廻しを採って他の言廻しを採らなかったか。そういう議論に、仏和辞典はほとんど全く役に立たない。嘗て私は東京で、仏和辞典を用い、英訳を参照し、その本をかなり丁寧に読んで、理解したつもりでいたが、私が理解していたのは、すじ書きにすぎなかった。私は東京で、ヴァレリーを読んで理解することはできるが、フランス語で話をするにはむずかしいと思っていた。パリの大学町では、フランス語で話をするには大してむずかしくないだろうが、ヴァレリーを読むのは容易でない、と考えるようになったのである。」（「第二の出発」『続 羊の歌』49 頁、改 55 頁）

(5) 「専門的な知的領域の全体に対して、一人の人間の態度を決定するような何ものかであった」

- ・初出では「一人の人間がとり得る態度を決定する一箇の原理にほかならなかった」⁷
- ・加藤はヴァレリーの「特定の考えや、特定の作品に対して」興味を持ったのではない。「その感覚的・知的世界の全体、その全体の構造——あるいはむしろ様式に、私にとっての一種の啓示があった」→「二〇〇八年八月、病床にあった加藤は「ヴァレリーを学ばなかったら、今の私はなかった」と語った」⁸

年、82 頁。

⁵ 岩津航『レトリックの戦場——加藤周一とフランス文学』丸善出版、2021 年、11 頁注 5。

⁶ 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか——『羊の歌』を読みなおす』岩波書店、2018 年、354 頁。

⁷ 加藤周一「羊の歌 18 青春」『朝日ジャーナル』1967 年 3 月 26 日号、55 頁。

⁸ 鷲巣力『加藤周一を読む——「理」の人にして「情」の人』岩波書店、2011 年、46 頁。

・加藤のヴァレリーについての主な著作

「ポール・ヴァレリー」『詩人』1947 年 5・6 月号（著 1 巻に収録）

「夕陽妄語 ヴァレリーの想出」『朝日新聞』1996 年 7 月 22 日（『羊の歌』余聞』に収録）

「私のヴァレリー」『現代思想』2009 年 7 月臨時増刊号、1996 年 9 月 24 日の日仏会館での講演

第 3 段 《マティネ・ポエティック》の仲間たち（前半）

赤堤の家には、何人かの友人たちが、いわば類をもって集ることがあった。仏文科の学生であった山崎剛太郎や中村真一郎は、「失われし時をもとめて」を精しく読んで、みずから小説を書こうとしていたし、福永武彦はその頃すでに「悪の華」や「巴里の憂鬱」の訳をつくっていたにちがいない。本郷の大学の法学部に通っていた窪田や中西は、マラルメに熱中し、独文科の学生であった原田義人も、ドイツ語の詩文ばかりでなく、フランスの象徴派の詩人たちに関心をもっていた。私たちは、多くの場合に、駄弁を弄していたにすぎないけれども、またときには、嘗て駒場の寮で「万葉集」を輪読したときのように、アンジェロスの仏訳を参照しながら「ドゥイノの悲歌」を読んだり、アランの註をみながら「若きパルク」を読もうとしたこともある。ひとりで読んでわからぬものは、衆知を集めても、容易に埒があかなかった。しかしそういう口実を設けて、規則的に集っていたので、私たちの間の関係は親密になった。そればかりではなく、シナの詩を読んでいた昔の日本人が漢詩をみずからつくり出したように、西洋の詩を読んでいた私たちは、いわば原作のない訳詩をつくりたいと考えるようになった。昔の日本人（の大部分）も、シナの詩をシナ語の詩として読んでいたのではなく、訓読して一種の日本語の詩としていた。私たちもまた西洋の詩を、西洋語の詩として読んでいたのではなく、他人の訳に頼らずに、みずから訓読しようとしていたのである。福永は「悪の華」のフランス語をたのしんでいたのではなく、「悪の華」と日本語とを素材として、彼自身の詩をつくろうとしていた。窪田はカトゥスやロンサールの恋愛の詩のなかに、「古今集」以来の恋歌の反映を見出していたのであろう。中西はマラルメの一四行詩の知的挑戦を好んでいた。一篇の詩のなかに凝縮された世界の、それよりも単純なものは、水を割った酒のようでおもしろくない、と彼はいった。（191～192 頁、改 216～217 頁）

(1) 「類をもって集」った仲間たち

- ・ **山崎剛太郎**（1917～2021）：詩人、仏文学・映画字幕の翻訳家。第一高等学院→早稲田大学文学部仏文学科（～1940）。中村と共に「失われし時をもとめて」を精しく読んでいたとあるように、卒論はマルセル・プルースト論⁹
- ・ **中村真一郎**（1918～97）：詩人、小説家、評論家。第一高等学校文化丙類→東京帝国大学文学部仏文学科（1938～41）。卒論は「ジェラルド・ド・ネルヴァル論」で、ロマン派の詩人、

⁹ 山崎剛太郎（聞き手・山崎吉朗）「僕の生活はフランスから一歩も離れなかった——101 歳の山崎剛太郎氏インタビュー」『複言語・多言語教育研究』7 号、2019 年、4～8 頁。

ネルヴァルの『幻想詩集』に象徴主義を認め、定型詩の創作に向う¹⁰

- ・福永武彦 (1918～79)：詩人、小説家。第一高等学校文科丙類→東京帝国大学文学部仏文学科 (1938～41)。卒論は「詩人の世界——ロオトレアモンの場合」。「悪の華」や「巴里の憂鬱」の訳をつくっていた」とあるように、定型押韻詩の手本を象徴派の先駆といえる詩人、シャルル・ボードレールに求め、『悪の華』(1857)の定型詩篇を訳して習作とした¹¹ (「悪の華」と日本語とを素材として、彼自身の詩をつくろうとしていた)
- ・窪田啓作 (1920～2011)：仏文学者、詩人、銀行員。東京帝国大学法学部 (～1943)¹²
- ・中西哲吉 (1921～45)：第一高等学校→「本郷の大学の法学部に通っていた」とあるが、正確には東京帝国大学経済学部に進学¹³。窪田と共に「マラルメに熱中し」ていた
- ・原田義人 (1918～60)：独文学者。第一高等学校文科乙類→東京帝国大学文学部独文学科 (1940～42)¹⁴

→仲間たちは、一様にボードレール、マラルメ、ヴァレリーら「フランスの象徴派」の詩人たちに強い関心を抱いていた

象徴主義は「言葉の客観的、具象的、知的内容にこだわらず、言葉の音調、連想、心象、隠喩、象徴などを利用して最も内面的な観念、情趣を連想しようとする芸術上の運動」¹⁵

(2) 《マティネ・ポエティック》への助走

- ①「嘗て駒場の寮で「万葉集」を輪読したとき」＝一高国文学会の活動の一環として開かれていた「万葉集輪講の会」。加藤の他に大野晋、小山弘志、白井健三郎、中村真一郎らが参加し、五味智英教授の指導の下、『万葉集』を「一字一句をおろそかにせず、正確であり得る限度まで正確」(131 頁、改 148 頁)に読むことを目指した→『万葉集』の精読によって、日本語の詩型や押韻に関心が向かう¹⁶
- ②「万葉集輪講の会」のように、アンジェロスの仏訳を参照してドイツの詩人、リルケの詩集『ドゥイノの悲歌』(1923)を読み、フランスの哲学者、アランの註釈を見ながらヴァレリーの詩集『若きパルク』(1917)を読もうとした。容易に読めなかったものの、それによって親密な関係に

¹⁰ 田口亜紀「定型詩からフィクションへ——中村真一郎におけるネルヴァル」坂巻康司編『近代日本とフランス象徴主義』水声社、2016 年、128 頁。

¹¹ 西岡亜紀「福永武彦におけるボードレール——研究と創作のあいだ」坂巻前掲『近代日本とフランス象徴主義』152 頁。

¹² 井上健「翻訳家窪田啓作の戦中と戦後——定型詩実験、散文創作から『異邦人』翻訳へ」『上智大学文化交渉学研究』2019 年 3 月号、13 頁。

¹³ 鷲巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』181 頁。

¹⁴ 「原田義人年譜」原田義人『反神話の季節』白水社、1961 年、280 頁。

¹⁵ 『ブリタニカ国際大百科事典』。

¹⁶ 加藤周一「中村真一郎、白井健三郎、そして駒場——思い出すままに」鷲巣前掲『『羊の歌』余聞』初出 1998 年、118～119 頁。

- ③「西洋の詩を読んでいた私たちは、いわば原作のない訳詩をつくりたいと考えるようになった」≡シナの詩を「訓読して一種の日本語の詩としていた」昔の日本人のように、私たちが西洋の詩を西洋語の詩として読むのではなく、「みずから訓読しようとしていた」→中村の提案で、自作の詩の朗読会に発展

第 3 段落 《マティネ・ポエティック》の仲間たち（後半）

そういう空想的な仲間のなかで、中村真一郎は、実際的な精神を備え、詩と詩人についての豊富な知識をもち、具体的な提案を次から次へと思いついていた。お互いに発表する機会のない詩を書いているのだから、仲間の間で朗読しようではないか、と中村はいい、その詩の朗読の集りを、たわむれに、《マティネ・ポエティック》と呼んだ。その名まえは、いくさの後で私たちが共同で出版した詩集の題名にも使われて、世間に知られるようになった。中村は、文筆の専門家として、または少なくとも将来の専門家として、自分自身を意識していたようである。専門家は訓練によって素人から区別される。訓練が成りたつためには、その仕事に規則がなければならない。すでに漢詩にも平仄の繁則があり、俳句にさえも季題があった。和歌俳句以外の日本語の詩にも、定型があつてしかるべく、定型は、音綴の数と行数ばかりではなく、脚韻によっても限定されれば、それにこしたことはないだろう。いくさのまえに早くもそのことを唱えた九鬼周造の理論は、十分に説得的であつた。しかし九鬼の作例は、脚韻の可能性の一部分を実現していたにすぎない。中村は私たちが共同で、脚韻の詩の可能性を、嘗て九鬼が試みたよりも広く探求できるだろう、と論じ、私たちはその新しい実験に興味をもつようになった。戦後私たちの詩集があらわれたときに、批判者たちは「脚韻は日本語では成功しない」と論じたけれども、その論拠は、九鬼・中村の理論とくらべはるかに浅く、幼稚なものにすぎなかった。中村も私たちも、その点でまちがっていたのではない。《マティネ・ポエティック》の詩人の不幸は、現代の日本語を素材として、前世紀末のフランス語を前提とした象徴派の詩にちかづこうという、不可能な企てに熱中したことである。しかしその頃の私たちの関心は、北原白秋にではなく、マラルメにあつたのだから、不幸はおこるべくして起つた¹⁷と考えるほかはない。私はその後、あの恐るべき米国生れの英国人の書いた「荒地」が、多くの若い詩人たちを不可能な窮地へ追いこむのを見て、しばしば、私たち自身の昔を想い出した。問題ははじめから、脚韻ではなくて、言葉にあつた。私たちはそのことを充分に知っているつもりだったが、しかも決して充分にはなかつた……（192～193 頁、改 217～219 頁）

(1) 《マティネ・ポエティック》の結成

- ・「マチネー・ポエティックは、一九四二年秋より、毎月一回、主として東京加藤周一の宅に会し、各自の作品を朗読の形で発表する、若い詩人の集りであつた。戦争末期に中絶したが、最近復活して、今日に至る。〔……〕発表された作品の大部分は、詩であり、詩の大部分は、脚韻を有する定型詩」¹⁷。戦後『マチネ・ポエティック詩集』（真善美社、1948 年）を刊行

¹⁷ 加藤周一「マチネー・ポエティックとその作品に就いて」『近代文学』2 巻 3 号、1947 年 4 月、24 頁。

- ・メンバーは上記の山崎、中村、福永、窪田、中西、原田、加藤に加え、白井健三郎（1917～98）、小山正孝（1916～2002）、原條あき子（1923～2003）、枝野和夫
- ・福永による命名か。福永によれば、パリのヴィユ＝コロンビエ座で戦時中にジャック・コポーが開いた詩の朗読会 *Matinées Poétiques* に因む¹⁸
- ・なぜ、結成されたのか？ 中村によれば、戦時色が濃厚になるなかで、同人雑誌も出せなくなり、一般の文芸雑誌なども変容。「私たちは、そうした小さな集りのなかへ追いこめられていたわけだった。が、一方では、そのなかでは完全に自由だった」¹⁹≡「仏文研究室」
- ・「中村 マチネ・ポエチックのころは、紙がなくて文集を出せなかったね。

福永 けっきょく、なんてことはないんだね。友だちが集まるときに作品を持ち寄る。持ち寄ったものを読むというような方法しかなかった。だから、あのころ、加藤周一はショパンが好きだったから、彼の家でやるときは、ショパンのレコードを聞くのも、われわれの楽しみだった。

中村 あのころ読んだのは、おもに詩だったんだろうね。長い小説なんて読めないもの。

福永 いや、読んだ、読んだ。ぼくは『風土』の初めの部分を読んだもの。『風土』を読んで加藤周一に批評されて、それもそうだななんて考えて、破いてまた書き直したりしてたからね。たしかに、加藤は、医学論文なんか読んだよ。

中村 そうそう。

福永 加藤のは、聞いていてもちっともわからなくて、これはひどいと思った（笑）。

中村 あれは、ヤスパースの「医学と哲学の境について」という論文だったな。

福永 詩がいちばんいいんだよ。詩は読んだあと、みんなで回して見ることができからね。特に耳で聞いていいか悪いかということが眼目になっている詩だからね。〔……〕²⁰

(2) 中村真一郎による押韻定型詩の提唱

- ・「九鬼周造の理論」（＝九鬼周造「日本詩の押韻」『文芸論』岩波書店、1941 年）に依拠しながらも、実作によって「脚韻の詩の可能性」をより広く探求する
- ・中村「詩の革命——《マチネ・ポエティック》の定型詩について」『近代文学』1947 年 9 月号
「現代の絶望的に安易な日本語の無政府状態を、矯め鍛へて、新しい詩人の宇宙の表現手段とするためには、厳密な定型詩の確立より以外に道はない。（それが如何に困難であらうと）『歌経標式』以来、千年にわたる我々の詩人たちの夢であった、韻の問題も此処で始めて実現過程に入るであらう。」²¹

¹⁸ 中村真一郎『戦後文学の回想』筑摩叢書、1963 年、31 頁。西岡前掲「福永武彦におけるボードレール」152 頁。

¹⁹ 中村前掲『戦後文学の回想』29 頁。

²⁰ 中村真一郎・福永武彦「自由と死の谷まで」『福永武彦対談集 小説の愉しみ』講談社、1981 年、初出 1971 年、124～124 頁。

²¹ 『マチネ・ポエティック詩集』思潮社、1981 年、16 頁。

- ・押韻定型詩の提唱自体に、戦時体制やそれに迎合する詩壇に対する批判が含意されているのではないかと戦時下に風靡した「愛国詩や戦争詩と呼ばれるものは朗読という形で放送され、戦意高揚や銃後のあるべき姿勢を喧伝する一翼を担ったといえる。聴覚に訴える作品として流布することを想定した場合、詩はリズムを持った作品になりやすい。〔……〕七五調や紋切り型の定型句が席卷していく背景にはそうした事情も考えられる」²²
- ・最も多く採用された詩型は、4・4・4・3 の 14 行からなるソネット形式。なぜなら「四句押韻と三句押韻の併用といふ最も音楽的な機能を回復するため」だった。この詩型は、第 1 連と第 2 連は同一の ABBA、ABBA と韻を踏まねばならないが、日本語での完全な達成は難しく、そのため厳密なソネを作ったのは加藤、福永、中村のみ²³

(4) 「批判者たちは「脚韻は日本語では成功しない」と論じた」

- ・《マティネ・ポエティック》は、1947～48 年にかけて詩を発表するが、文壇・詩壇からは「理論はともかく、口ほどにもない作品しか書けないとして酷評される」²⁴。例えば『近代文学』の荒正人や、『荒地』の鮎川信夫から厳しい批判があった
- ・三好達治「マチネ・ポエティックの試作に就て」『世界文学』1948 年 4 月号
母音が「まんべんなく散在していて、常に均等の一子音一母音の組合せ」の日本語では、押韻の効果は期待できない。日本語において脚韻の位置を占める、動詞の語彙数の圧倒的な少なさ→「邦語現代詩に於ける押韻（専ら脚韻）は、他の何人がたち替ってこれを試みても、絶対に成功の可能性の見込のないことを信ずる」²⁵
- ・加藤は上記の批判を一蹴するものの、「《マティネ・ポエティック》の詩人の不幸は、現代の日本語を素材として、前世紀末のフランス語を前提とした象徴派の詩にちかづこうという、不可能な企てに熱中したこと」と総括する

(5) 「あの恐るべき米国生れの英国人の書いた「荒地」が、多くの若い詩人たちを不可能な窮地へ追いこむ」

- ・「あの恐るべき米国生れの英国人」=T・S・エリオットの詩『荒地』（1922）にちなみ命名された、詩誌『荒地』が 1947 年に復刊し、そこに鮎川信夫を中心に三好豊一郎、黒川三郎、田村隆一、中桐雅夫、北村太郎、加島祥造、木原孝一ら 20 代の詩人たちが集った。グループ初のアンソロジーは『荒地詩集 1951』（早川書房、1951 年）であり、以後刊行を続けたが『荒地詩集 1958』（荒地出版社、1958 年）を以て活動を終えた。『荒地』派は「〈音楽性〉

²² 早川芳枝「戦時下のアンソロジー」和田博文編『戦後詩のポエティクス 1935～1959』世界思想社、2009 年、45 頁。

²³ 「NOTES」前掲『マチネ・ポエティック詩集』160～161 頁。

²⁴ 川勝麻里「『マチネ・ポエティック詩集』」和田前掲『戦後詩のポエティクス 1935～1959』88 頁。

²⁵ 『現代日本文学大系 82 加藤周一・中村眞一郎・福永武彦集』筑摩書房、1971 年、412～413、415 頁。

に対する〈意味〉の詩としてマチネ・ポエティックに対峙していた」²⁶

- ・「同人に共有された「現代は荒地である」という主題は、第一次大戦後の近代文明への不信を内面化した状態で戦争を通過した「我々」にとって、終戦そのものは救いではあり得ず、従って近代の再建へ向けて揚々と発進しようとするような舵取りには同調し得ないという、深刻な懐疑の姿勢を意味していた。」²⁷
- ・《マチネ・ポエティック》と『荒地』とを重ねあわせたうえで、「問題ははじめから、脚韻ではなくて、言葉にあった」と述べる

第 4 段落 近づく「いくさ」の足音

いくさは私たちの戸口にまで迫って来ていた。詩を書いていた仲間のなかで、福永がまず健康を害し、まもなく結核療養所へ去った。大学卒業と同時に、山崎は、日本軍の占領していた仏印へ、通訳として出発した。行先は中部仏印の古都で、そこには王宮があり、王宮には女王が住んでいるのだ、といていたが、敗戦後も戦犯の容疑で帰国をひきのばされ、ながい間戻らなかった。窪田は、銀行員として、上海の支店へ出かけた。結婚していたが、妻子は東京に残した。原田と中西の二人は、陸軍に召集された。原田はやがて幹部候補生となり、軍刀を提げて私たちのまえにもあらわれたことがある。「立派な軍人だね、板についているな」と中村がいい、「ひやかすなよ、人の気も知らないで」と原田はいった。しかし原田の軍服は、たしかに私の眼にも板についているようにみえた。中西は幹部候補生を志願しなかった。兵営からはしばらくの間家族あてに手紙が来ていたが、やがて、輸送船に乗せられて南方へ送られるらしい、という報らせを最後として、その後の通信は絶えた。原田は戦後帰ってきたが、中西はふたたび還らなかった。東京には、召集されなかった中村が仏文の研究室に、私が大学の附属病院にのこった。(193～194 頁、改 219～220 頁)

(1) 同人たちと「いくさ」

| | | |
|--------|------|---|
| 1941 年 | 5 月 | <u>中村</u> 、東京帝国大学文学部仏文学科卒業後、徴兵検査を受け、丁種不合格。以降、同大学仏文研究室に残る |
| | 12 月 | 真珠湾攻撃、アジア太平洋戦争始まる |
| 1942 年 | 秋 | 《マチネ・ポエティック》を結成 |
| | 10 月 | <u>原田</u> 、東京帝国大学文学部独文学科卒業後、陸軍に召集される（幹部候補生となる） |
| | 12 月 | <u>福永</u> （参謀本部に勤務）、召集を受けるが、盲腸炎手術後の腹帯のおかげで即日帰郷となる。その後、肺炎で病臥 |
| 1943 年 | 9 月 | <u>加藤</u> 、東京帝国大学医学部を繰り上げ卒業。同大学附属医院医局（佐々内科）に副手として勤務 |

²⁶ 田口麻奈「荒地派と一九五〇年代」和田前掲『戦後詩のポエティクス 1935～1959』68 頁。

²⁷ 田口麻奈『〈空白〉の根底——鮎川信夫と日本戦後詩』思潮社、2019 年、26～27 頁。

| | | |
|--------|------|---|
| | 10 月 | <u>山崎</u> 、外務省に勤務しており、フランス領インドシナのフエ（元は阮朝の首都）の日本領事館に赴任 ²⁸ 在学徴集延期臨時特例公布（学生・生徒の徴兵猶予停止）、学徒出陣 |
| 1944 年 | 8 月 | <u>窪田</u> 、横浜正金銀行上海支店に赴任し、旧フランス租界に居住（敗戦により帰国） ²⁹ |
| 1945 年 | 5 月 | <u>中西</u> 、陸軍の学徒兵として出征していたが（幹部候補生を志願せず）、フィリピンで戦病死 ³⁰ |
| | 8 月 | 敗戦 <u>原田</u> 、戦地より復員する |

(2) 召集された原田、中西と召集されなかった中村、加藤

- ・海老坂武「いずれにせよ周一青年は召集されなかった。これを当人はどのように受けとめたか。」「加藤周一における戦争体験とは何かを考えると、戦争に行かなかったというこの事実が大きな意味を持っている、と私は考える。」³¹
- ・鷺巣力「加藤は理系だったこともあり、召集されなかったが、いつ召集されるか分からないという不安と、召集されずに済んだことに対する「後ろめたさ」を感じていた。それが後年に「サヴァイヴァル・コンプレックス」を口にする理由のひとつだったのでは」³²

²⁸ 山崎前掲「僕の生活はフランスから一步も離れなかった」9～13 頁。

²⁹ 井上前掲「翻訳家窪田啓作の戦中と戦後」13 頁。

³⁰ 「NOTES」前掲「マチネ・ポエティック詩集」初出 1947 年、165 頁。

³¹ 海老坂武『加藤周一——二十世紀を問う』岩波新書、2013 年、30 頁。

³² デジタル版展示「知識人の自己形成——丸山眞男・加藤周一の出生から敗戦まで」(<https://www.ritsu-me.ac.jp/lib/f09/040/070/#s21>) より。